

くろくちやんとくちやんよ

名瀬市立朝日中学校 三年 出水 ちあき

千代は、鬼だった。人の姿をした鬼だった。人間と変わらぬ
い姿をしていたが、唯一違つのは頭に二本の角が生えていると
いう事だった。年は十七歳で、静かな山奥の小屋で一人ひっそ
りと暮らしていた。たまに山奥に迷い込んだ人間と出会う事も
あるが、皆、千代の角を見ると悲鳴を上げて逃げ出した。だが
千代はそれで良いと思っていた。千代は人間が好きだったが、
人間と関わるのは嫌いだったからだ。ただ遠くから見ていられ
れば、それで良かった。

ある日千代は山菜を採りに小屋の外へ出た。道のない山の中
をしばらく歩いていっていると、ふと、木の根元で若い男が倒れてい
るのを見つけた。追いはぎにでもあったのだらう。遠くから見
ても、男がひどいケガをしている事が分かる。千代は迷つた末、
やはり放つてはおけないと思い、持っていた手拭を頭に巻いて

角を隠し、おそろおそろ男に近付いた。男は、千代と同じくら
い若く見え、真っ黒な短髪が風でサラサラと揺れていた。男は
千代が近づくとすぐに目を開けてぎろつと千代を睨みつけた。
千代は驚いてびくりと震えたが、すぐに気を取り直してまた近
付いた。男は足にひどいケガをしていて、体にも無数の小さい
傷があつた。

「手当をしますから、家に来て下さい！」

千代はなんとか男を背負つて歩き出した。男は降ろせだの何だ
のと喚いていたが、ひっそりと佇んだ小さな千代の小屋を見る
と急におとなしくなつた。

男の名は勘九郎といった。年は十五で千代より二つ年下。背
は千代より僅かに低い。だが勘九郎はひどく傲慢で図々しい男
だった。千代が手当をしている間も、「要領が悪い」「だの」「下
手くそ」「トロイ」だのと文句が絶えなかつた。「手当してあ
げてるのに」と言つた。「うるさい。嫌ならいい」とそつぽを向

く。なんとか手当が終わると、すぐに出て行くつもり。まだあるいちやダメだよ」と引き留めるが聞こうとしない。よほど急ぎの用でもあるのだろうか。しかしこんな状態で外へ出れば野垂れ死にするのが目に見えている。千代が勘九郎を見捨てられる筈が無く、ケガが治るまでの間、と言いつ聞かせ、なんとか引き留める事に成功した。引き留めたのは良いが、千代は勘九郎があまり好きでは無かった。口は悪いし態度もでかい。勘九郎の傷が治ったら自分の角を見せてやろうと思った。そうすれば勘九郎も他の人間と同じ様に、自分を恐れて逃げて行くだろうと、もう一度とここに近寄りなくなるだろうと思った。そう。あの時と同じように……。

千代がまだ七歳の頃に、一人だけ友達ができた。その頃はまだ、ある村の近くに住んでいた。村の外れで一人で遊んでいた千代に、唯一声をかけてくれた男の子。名前はその昔に忘れてしまった。確か、千代を見つめた瞳が驚くほど真っ黒だった

ので、くろちゃんと呼んでいた気がする。千代より年下で背も低かった。だがずいぶんと偉そうな態度だった。いろいろと意地悪もされたが、くろちゃんだけは、自分を見ても恐れる事もなく一緒にいてくれた。もしかしたら、意地悪で威張りん坊でわが儘だったくろちゃんも友達がいなかったのかもしれない。だから自分と一緒にいてくれたのかもしれない。それでも千代は嬉しかった。今まで一人でしか遊んだことの無い千代にとつてそれはとても新鮮なものだった。それにくろちゃんはちゃんと自分に優しくかった。泣かされる事もあったけど、いつも最後には手を繋いでくれた。千代はその瞬間が一番好きだった。今思えば、自分はくろちゃんに恋をしていたのかもしれない。だがそれも長くは続かなかった。村人たちの手によってくろちゃんと千代は引き離された。今でも覚えている。あの時の、恐怖と怒りに歪んだ村人たちの顔を。村から出て行け！バケモノめ！そういう類のことを言われながら石を投げられた。くろち

やんは村の大人たちに何処かへ連れて行かれた。あたしは一人ぼっちになった。誰も助けてはくれない。当然だ。あたしは鬼なんだから…。千代は怖くなって逃げ出した。走って、走って、村が見えなくなってもまだ遠くへ。何日走ったか分からない。誰もいない山の中で、誰も住んでいない小屋を見つけて…。だから勘九郎も同じだと思った。角をみせればあの時と同じ様に、自分から離れていくだろう。

あれから千代は人間と関わるのが怖かった。だから極力人と会わないように山奥で暮らした。でも人間を好きという気持ちに変わりは無かった。今まで人を憎いとおもったことは無い。今回のこの異例な出来事も、早く終わってしまえば良いと願っていた。

勘九郎が来てから数カ月がたった。勘九郎は相変わらず傲慢で図々しいままだった。でも何故か千代に優しくなった。そして千代は勘九郎と一緒に居るととても楽しかった。千代が転んだ

時、「ドジ」「のろま」と馬鹿にしつつもちゃんと手を差しのべて立ち上がらせてくれた。傷の担当だってしてくれ。千代が熱を出した時、一晩中寝ないですつと側に居て看病してくれた事もあった。千代にはそんな優しさが嬉しくてたまらなかった。勘九郎とくろちゃんを重ねて見えたのかもしれない。まるであの頃に戻ったかの様だった。千代はずっと頭から薄い布を被^{かぶ}って角を隠していた。最初は後で驚かせる為だった。だが段々と、本当に角を見せるのが嫌になっていった。そうして日々を重ねていくうちに、千代は勘九郎と離れたくないと思うようになった。勘九郎の傷はもうだいぶ癒えてきている。普通に歩いたり走ったりすることもできるようになった。千代は勘九郎と別れなければいけなかった。でもまた一人になるのが怖かった。だが千代はそれ以上に、勘九郎に自分が鬼だとばれて嫌われる方がずっと怖かった。せつかく仲良くなれたのに、またあの時の様な別れは嫌だった。千代にとってくろちゃんとの別

れはあまりにも辛^いすぎたから。千代はその夜、固く決意した。

次の朝。千代は外にある井戸で顔を洗っている勘九郎に向かつて言った。

「傷、治ってきたね。もうここに居る必要も無いんじゃないの」
勘九郎はひどく驚いていた。そしてしばらく考える様に下を向き、出てきた言葉は

「ずっとここに置いてくんねえか」

今度は千代が驚いた。最初はあんなに出て行きたがっていたのに、なんて図々しいのだらうと思った。だが少しも嫌な気はしなかった。逆に千代はものすごく嬉しかった。自分と同じ様に勘九郎も想っていてくれたのだと。しかし、千代は益々怖^まくな^まった。本当に自分は勘九郎と離れられるのかと。だが絶対に勘九郎に鬼だと知られたくない。知らればきつと嫌われてしまう。一人ぼっちになっても構わないから、だからどうか嫌わな^いでほしい。千代はハッキリとだめだと言った。しかし勘九郎

は、尚^なも食い下がる。「一緒になるつ」「ダメですつ」「こんなやり取りが何回続いただろつ。千代は今にも「早く出て行って」と悲鳴を上げそうになった。これ以上一緒に居たら本当に勘九郎と離れられなくなってしまいそうだった。そんな時、突然勘九郎が声を上げた。

「いつもお前^{かみ}が被^かってる布を取ったら考えてやる」

何といつ事だろつ。それは、千代が一番恐れていた言葉なのに。きつと勘九郎は、何度布を外せと言っても外そうとしなかった自分の事が気に掛かっていたのだらう。だが千代が布を外せる訳がない。角を見られたくないから出て行けと言っているのに。千代は嫌^まが^まった。何度もかぶりを振った。しかし勘九郎は諦めてはくれなかった。布を取るまで出て行かないと言い張った。千代は涙を流した。もう泣くしかなかった。せつかく勘九郎と出会えたのに、もうこんな事二度と無いかもしれないのに。

ポロポロと、次から次へと雫が零れた。勘九郎は千代の涙に一瞬怯んだがそれでも引かなかった。ただ、じつと静かに千代を見つめていた。ようやく千代が布に手を掛けた。そしてゆっくりと外していく。現れたのは二本の角、鋭く尖り、真っ直ぐに天を仰ぐ鬼の証し。勘九郎は目を見開いた。千代は大声で泣き始めた。もう何もかも終わってしまった。また一人ぼっちになっちゃった。千代はその場に泣き崩れた。手で顔を覆いしやくり上げて泣いた。膝を抱えてうずくまり、ずっとこうして泣いていようかと思った。死ぬまでずっと…

その時信じられない事が起こった。勘九郎が千代を抱き締めたのだ。そして千代の耳元でそっと囁いた。

「お前本当に俺の事覚えて無いのか？」

千代は何の事か分からなくて首を傾げた。勘九郎は呆れた様に溜息をついた。

「くろちゃんだ。くろちゃん」

ぱあっと、涙で歪んだ視界が晴れた気がした。あの時の、怖がる事なく自分の側に居てくれた少年が、生意気で意地悪で、でも優しいあの少年が、今、目の前に居るといつのだ。千代は信じられなかった。何故ならあれは十年も昔の事だったから。それに少年と出会ったのは、ここから山を三つも越えた所にある遠くの村だったから。だが千代を見つめる瞳は綺麗な程に真っ黒だった。話によると、勘九郎はずっと千代を探していたらしい。遠くの山に鬼が住んでいるというウワサを聞いて、いてもたってもいられずに村をとび出したそうだ。千代はまたわんわん泣いた。今度は嬉しくて…。

今まで胸に抱えていたものが全て流れ落ちる位、千代は泣き続けた。そしてその後は、勘九郎と一緒にずっとずっと笑っていたそうだ。

山奥の小屋に住んでいる鬼は、今でも幸せそうに笑っているらしい。